

Raffiné Journal vol.19

未来の空気を読む



まだ何も起きていないのに、
空気だけが先に変わることがある。

景色は同じままなのに、
感覚だけが
少し先の空間に触れている。

未来は、
出来事として訪れるとは限らない。

空間のほうが、
先に変わることがある。

目の前の景色は変わらない。

街の音も、人の動きも、
いつものまま流れている。

それでも、
感覚だけが
まだいない場所に触れてしまう瞬間がある。

身体はここにある。
けれど、空気だけが違う。

そのとき人は、
時間ではなく、
空間のずれの中に立っている。

信号待ちの列に立っていた。

特別なことは何もない。
いつもの景色だった。

それでも、そのとき
身体がわずかに浮いた。

足は地面についている。
それなのに、
感覚だけが少し前に出ている。

この場所の空気ではない。

まだ行ったことのない場所の空気を、
どこかで先に読んでしまったような感覚だった。

信号はまだ赤だった。

けれど、
感覚だけが先に
その先の空間に触れていた。

電車の窓の外を見ていたときも、
同じことが起こる。

街は変わらず流れている。

建物も、人も、
いつもの位置にある。

それでも、
この景色の“先”にある空気だけが、
先に立ち上がってくる。

まだそこにはいない。

それでも、
その場所の空気だけを
すでに知っているような感覚がある。

人と話しているときにも、
その現象は現れる。

言葉はまだ途中なのに、
その先の空気だけが
すでに決まっている。

会話は続いている。

けれど、
その場がどこへ向かうのかを、
身体のどこかが先に知っている。

まだ起きていないやり取りの先にある、
関係の温度。

それが、
言葉よりも先に立ち上がることがある。

未来は、
時間としてやってくるだけではない。


空間として、
先に立ち上がる。

景色は変わらない。
時間もまだ動いていない。

それでも、
空気だけが変わる。

人はその空気に触れたとき、
まだいない場所に
一度立ってしまう。

現実には、
あとから追いついてくる。

The image shows the lower legs and feet of two people walking away from the camera on a paved path. The ground is composed of large, light-colored rectangular tiles. Long, dark shadows are cast on the path, extending from the people towards the foreground. The lighting is warm and golden, suggesting late afternoon or early morning. The overall mood is contemplative and forward-looking.

未来は、
ときどき空気だけで
先に現れる ——

R.

Raffiné Journal vol.19
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné